

サッカー日本代表が文科省訪問

W杯の成績報告、森保監督「世界一」をとる日来る」

FIFAワールドカップ(W杯)北中米大会を終えたサッカー日本代表の森保一監督らが7月8日、文部科学省を訪れ、松本洋平文部科学大臣に大会の成績報告を行った。

今大会、日本代表はグループステージにおいてオランダ、チュニジア、スウェーデンと対戦し、1勝2引き分けの2位で通過した。決勝トーナメントでは、強豪ブラジルと対戦し、1-2で惜敗。ベスト32で大会を終えることとなった。

この日、文科省を訪れたのは森保監督と板倉滉選手、前田大然選手、菅原由勢選手のほか、日本サッカー協会の宮本恒靖会長、山本昌邦技術委員長兼ナショナルチームダイレクター。優勝を目標に掲げていた森保監督は「こんなに早く帰って来たくなくて……。また悔しさが込み上げてきました。『世界一』はとれなかったですが、絶対、未来には世界一をとる日が来ます。険しい道のりになると思いますが、(国民の皆さんには)この道のりについて共感・共鳴していただき、一緒に世界一を喜べる日が来るまで、今後も応援よろしくお願いたします」と述べた。また、

今大会、主将として臨んだ板倉選手は「本気で優勝を目指していましたし、みんなが同じ方向を向いて素晴らしかったです。ただ、負けたのは事実で受け止めないといけない。この負けを無駄にせず、さらに日本サッカーが強くなれるように頑張っていきたい」と力強く語った。

松本大臣は「オランダやブラジルといった強豪に臆することなく、堂々と闘いを挑んでいる姿に、多くの国民が声援を送り、そして感動をいただいたと思います。これからますますのご活躍を期待しております」と述べ、選手らを称えた。

懇談で、松本大臣から「挑戦することの大切さ」について、子どもたちへのメッセージを求められると、前田選手は「日本においても海外においても、しっかりと自分の夢に向かって挑戦し続ければ、その場所がどこであろうと関係ない。『チャレンジする』という気持ちをもって、トライしてほしい」、菅原選手は「高校を卒業してすぐ海外へ渡ったが、言葉の問題など自分で何とかしなければならぬ壁」に日々直面していた。ただ、それを乗り越えるからこそ、人間的に強くなれる。厳しい環境に身を置き、自分で考える力を身に付けてこそ、人としてレベルアップできる」とそれぞれ語った。



日本代表選手全員のサインが入ったユニフォームを掲げる松本文科大臣(前列中央)と森保監督(前列中央◎)ら



面会后、取材に応じる森保監督



懇談で選手の活躍を称える大臣ら



監督からメモ張がプレゼントされた